慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	国立公文書館内閣文庫蔵『鳥歌合』解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1990
Jtitle	三田國文 No.13 (1990. 6) ,p.43- 49
JaLC DOI	10.14991/002.19900600-0043
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19900600-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

国立公文書館内閣文庫蔵

『鳥歌合』解題・翻刻

石川透

解題

木下長嘯子作とされる『鳥の歌合』は、『四生の歌合』の一つとして、数本の写本・刊本並びに近代の複製・活字本が存在している。内容については諸参考文献に譲るが、この作品が、文学史上、どの分野に属するものなのかきわめて問題である。ある時には室町時代物語として取り扱われ、ある時には仮名草子として論じられる。また、物語ではなく和歌として扱われる場合もある。成立時代は、長嘯子の活躍した近世初期としてよいのであろうが、内容的には室町時代物語の色彩を濃く有しているのである。実は、室町時代物語とされている作品には、このように近世になってからの作品が多く存在しているようであるが、その境界を明確にすることは不可能に近い。

このような問題を孕んでいる『鳥の歌合』には、近世のものと思われる類作が多く存在している。もちろん、これは『鳥の歌合』のみに限らず、『四生の歌合』の他の作品、例えば『虫の歌合』等にもみられることであり、中世から近世の文学享受の一端をうかがう好資料となるであろう。

今回は、『鳥の歌合』の類作として、『増訂室町時代物語類現存本簡明目録』等に書名が記されている、内閣文庫蔵の『鳥歌合』を紹介したい。本書の内容、並びに諸作品との関係の詳細については、次号以降紹介予定の作品を含めて別稿に譲るが、その内容は、『鳥の歌合』と同様に、鳥同士の十五番の歌合を、判詞を交じえて記すものである。しかし、場面設定や判者、登場する鳥の種類等には多くの相違点が存在している。『鳥歌合』では、難波津に住む翁が、鶯を判者とした鳥達の歌合を見聞するかたちをとっているのである。また、その成立時期を暗示する箇所として、導入部の終りに、

むかしより、玉虫に心をかけしむしとも、奇を作りて心をのへ玉へ。此こと世にもてはやすほとに、ちかき比、ひかしやまに侍ける翁、是をえらひ、池にすむかはつを判者とさため、左右をわかち、たかひに勝負を批判し、後には、身をひきかへるなとゝ、卑下の言葉を入、世に名をたかふす。

と記されている。「ひかしやまに侍ける翁」は木下長嘯子を指し、「勝負」とは『虫の歌合』を指すようであるから、これらに「ちか

き比」とは、近世の前期頃を設定していることになる。おそらく、この作品の成立も、それとさほど遠からぬものであろう。なお、『内閣文庫國書分類目録』には本書の作者を〔木下勝俊〕としているが、これは、『四生の歌合』を木下勝俊（長嘯子）作とする説による目録編者の推定であろう。

ここに、本書の書誌を記す。

番号、二〇一―二八九

形態、袋綴・一冊。〔近世後期〕写。

寸法、竪二六・八糎、横一九・一糎。

料紙、楮紙。

表紙、香色布目表紙。

外題、表紙左上に題簽、「鳥歌合」と記す。

内題、なし。ただし、扉に「鳥歌合 蔵」と記す。

丁数、一八丁。

行数、半葉九行。

字高、二二・〇糎。

印記、第一丁表に、「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」の朱印。

以下に、国立公文書館内閣文書蔵『鳥歌合』の全文を翻刻する。

翻刻に際して、次の方針をとった。

1　本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。

2　底本には補入箇所が存在する、ミセケチや訂正文字はもちろんだが、本文の読みを補助する文字も翻刻に記した。

3　私に句点・読点、並びに「　」等を付し、読解の便宜をはかった。

4　本文上の意味不明箇所には（ママ）を記した。

5　底本の丁数は、その頁の末尾に（　）をもって記した。

最後に、本書の閲覧と翻刻掲載の御許可を賜わった国立公文書館に厚く御礼申し上げたい。

なお、本書の調査に当り、文部省科学研究費補助金（奨励研究A）が利用されている。

（いしかわ　とおる）

鳥歌合（題簽）

遠からぬ世のことにやありけん、難波津の里に住ける翁のありけり。此所は、むかしはみやこにそなはりけるとなん、今はいにし人の跡かたもなく、あれたる里になん侍りける。翁の住居も、哀に篠屋の軒端にあしかきしわたし、はか〳〵しく草もはらはす、わつかなる道一筋をひらけり。相しれる人尋来りて「かゝる田舎には、いかにしていますそ」といへは、翁こたへていはく、「世につかふる（1オ）わさもかなはねは、なにはおもはぬすまゐこそ、心やすけれ」といへは、「さはあれと、心におもひとる所なくて、かゝるすまゐはならし。年月したしみをむすひつるに、心へたつるや」といへは、翁いはく、「誠に白雲万里をへたゝても、わすれかたきはしたしき友ならん。いてや、我この住居のおもひ出を語てなくさまん。まつ此難波の里は、むかしはかしこき皇のまし〳〵し御跡なれは、今もゆかしきことのみ侍る。春立朝は遠からぬ淡路の山も（1ウ）かすみて、日かけうらゝかなるに、つのくむあしも見へかく

れ、波の立ゐも風しつかなれは、あさりする蜑も、心のとかに磯なつみ、貝ひろふわさ、しほやくけふりも、霞にひして、つりの小船も爰かしこにうかふ。はる風しつかに吹は、やゝ霞もはれ、住吉の岸の姫松、あを〳〵と手に取はかりちかく、伊駒の嶽に雲消て、残の雪もかすかに見へ、心ある人にみせはやとのみおもふに、軒端にちかき梅も、そろ〳〵とひもとく比、ひとく（2オ）〳〵といとひし鳥も、今はなれ顔に、朝な夕なに鳴わたり、二月中の五日は、仏のわかれとて、なにこの寺のかねの音も、心すむわさになん侍る。弥生も半立は、芦分小田をすき返し、苗代の時や来ぬらんと、民も野に手うつす戸の、わか木の桜も盛なりと里人の告るもうれし。しけりそふ芦間に、ほとゝきす初音も草の枕に露をく、うへわたす早苗も、あしか苗かと見わかす。五月雨のふるやの軒は（2ウ）ひとしほにしほたるゝ心地す。ほり江の水もまさり、漕行舟も芦間をわけ迷ひ、みしかきあしのふしの間も、ねられぬまゝに見浅せは、あしにさはらてとふ蛍、すこくもふすふる蚊遣火のかけ、秋風ちかくなるまゝに、浦浪音たかく、しのゝ小薄ほにいてゝ、ほしあひの比は、舟出せし友もかな。こしおれ歌をもつらねて、七夕にたむけんとおもへとも、かゝる所には共わさ知人もなし、望月の比は、名にしおふ月なれは、都の空もなつかしく、雲（3オ）の上の御詠めさそとおもふに、男山の鏡より出る月、さり行光を二千里の外にもはなつ覧、明方ちかくまゝに、浪間を分て入月もなを、かけしはし淡路の島山にのこし、亦あすの夜のたのみをおもひ、よさむを告るかせの音に、衣うつ音も枕に近く、うらさひしき秋旁のたえまより、つりの小船いとあはれに、外山のさとや時雨らん、伊駒の峯は紅葉して、いま一しほの詠め也。難波の春は夢なれやとよみしにたかはす、かれたつ（3ウ）あしのよかせもすこく、明る湊になく千鳥の戸、朝満しほにかけ遠く、入日の影もかすかにして、汀のうす氷めつらかに、初霜むすふにそといふめり。いつしかさよかせも、音さへ行ほとに、芦の戸ををしあけみれは、淡路島住吉のきし、昆陽のまつ葉、みな白妙に雪ふり、なに見あたりのかよひ路も、たゝとふ人もかなと住みふるもおかし。すへて四季折〳〵のうつりかはるめの前にあり。これは、此うらは、恋する（4オ）人も当をよせ、浦行船の綱手なかへも恋わたかなと、詠し方のおもひをのふる、人は月を見て、なにはのうさも慰むるなとゝかたり、神の心をおもふ人は、平野のまつにふれる玉雪とよみ、法のをしへをまなふ人は、西をさしてそ契り置けると読し。をのか心〳〵になにはのよしあしをいゝつらね、世をのかれすむへき里になん侍る。いささらは、わかこの庭のたゝすまゐをみせ奉らん」と（4ウ）つゐにすかりていつ。かきねにちかきいさゝ小川をせき入水あさく小石なかれ、岸根のむめ一木わさとならぬ木たちものふりたり。東籬に菊を植て心有さま也。翁いはく、「見たまふことくに梅も咲たり。香もなひく、かやか軒端に吹入て心うきたつに、月のあかくさしうつるほとに、かの梅辺に座をかまへ、つく〳〵見いたれて、横斜疎影水消澄染といへる事の心にうかふ所に、もえき（5オ）色に染たるきぬうちかつきたるもの、妙法蓮華経の五字を名聞たにしく唱て、夢ともなく、うつゝともなく、予にむかひていはく、『さても世にあちきなき一すち有て、是にてまいり侍り我。おきなの御慈悲に願をかなへ給ふへしや』といふ。もとより、われ慈悲をむねとし侍れは、『心に及ふことはかなへ奉らん』といふ。そのとき、かのそのいはく、『むかしより、玉虫に心をかけしむしとも、奇歌を（5ウ）作りて心をのへ玉

へ。此こと世にもてはやすほとに、ちかき比、ひかしやまに侍ける翁、是をえらひ、池にすむかはつを判者とさため、左右をわかち、たかひに勝負を批判し、後には、身をひきかへるなとゝ、卑下の言葉を入、世に名をたかふす。其上古今の序にも、花になく鶯水にすむ蛙とあり。其蛙とのは世に名をあけ、鶯のことは何のさたも侍らぬこそ、ほいなくおほは侍れ。翁の御ゆるしあらは、相知る鳥共（6オ）すらともなひ、此梅の木陰を奇歌のむしろとさため、いにしへこそ姫に心をかけしことを思ひてしらむへし。かならす小鳥網餌飼さしのたくひをかたくいましめ給へ』と約来して飛去。客も翁もふしきの思ひをなし、まさしく鶯にこそ侍らめ。さらはとて、人をはらひ、ゑはをもとめて、梅の枝につけてかち侍るに、なにかはしらす、二三十か羽音して、梅の小枝あしかき草むらいさゝ小（6ウ）川にをりゐ侍り。客も翁もしはふきもせす、耳をきはたて聞しに、哀にもおかしきこともおほく侍り。（7オ）

十五番歌合　　判者菅原朝臣梅園黄鶯

一番

左　せきれい

神代よりえにしをしへし我なれとつれなき君はをとつれもせす

右　ほとゝきす

春されは花にと引きみなれとほとゝき過てあわぬ身のうさ（7ウ）

左の作者、神代のむかしを思へは、まことや、天のうき橋の下にて、女神男神とあらはれ給ふも、わかをしへし事のやうに、読なされ侍るは、凡慮のおよふ所にあらす。右の花にわゝ引とつらね給ふも、いとやさしくは侍れと、神代よりの歌、左の一番のことは架の勝といふにも、猶まさり侍らん。

二番

左　雲雀（8オ）

雲井まてあかるむはりの見をろしも草の床には住ぬ君哉

右　山鳥

足曳の山鳥の尾のしたり尾のなか〳〵し日も君そ恋しき

判云、左の歌、草の床には住ぬ君かなとすめるも、さもあるへけれと、右は、人丸の名作を大体とられ、勿論ふり事に侍るを、結句の君そ恋しきにて、翻案せられ、新しく也侍る。此たくひ昔よりおほきに侍れは、山鳥のかちに侍らんかし。（8ウ）

三番

左　鶉

君かすむ花の梢のかなはねは草の原にて鶉鳴なり

右　雉子

子をおもふ焼の雉子今更に君ゆへなきて人に知らるゝ

左の歌、よくわか身のうへをしりけるこそ、あはれもふかく侍れ。右の歌も、又さも有ぬへし。さりなから、なきてしらるゝといふ句、よはく侍るまゝ、左のかちに侍るへし。（9オ）

四番

左　かりかね

花をたに見すてゝ帰る鴈かねをしはしとゝめよ君かちきりに

右　おし鳥

いひ出ん名もおしとりの心からうきねあたなる浪枕して

右の歌、いひ出ん名もをし鳥と、其君をあらはし、うきねあたなる波まくらしてと、よみはたし侍る。一首のことから、恐くは古歌にもはち給ふましけれは、右を勝に定め侍るらし。（9ウ）

五番

左　くゐな

君かすむ槙の戸さしをたゝきつゝ世にたくひなき物思ひ哉

右　にほ

あふみなる鴉の入江に身をなけて思ひのふかきほとや知せん

左の作者、君ゆへならても、つねにたかくことの得てなるむまれつさに侍り。右、又、にほの入江に身をなけんとのたまふも、しはくかにり木のうへにもゐたまはゝ、そのしるしも有なん。元来（10オ）水を家とおほしめす御方なれは、いつれもかちとも申かたし。

六番

左　鳶

とひあかり雲のよそめはちかけれと君かあたりは夢にたに見す

右　鳥

人遠き深山からすのきく耳も君をはえこそ思ひわすれね

左は目のちかき御方、右は耳のきてく、世にくれなく侍れは、ともに亦持たるへし。（10ウ）

七番

左　千鳥

行衛なくあくかれぬとも浜千鳥とまらんあとを誰かしのはむ

右　鴫

君かすむ木かけの小田にひとり居て忍ひねもまた鴫のはねかき

右の忍ひねもあわれに侍れと、左の歌、をひ余りて、われとよみうる事かたきにや。春日のゝ若紫のすり衣と、彼業平のよみあひし返しに、みちのくの忍ふもちすりたれゆへにと、（11オ）融公の歌の心をとりかへしためしを思ひ、かれは人のうへ、われは翅の身にして、心をぬる。さかへたるにも、むしかりへけれよ、おもひよりのおかしきに事よせ、そのうへ優なての御歌に侍れは、尤勝てものちたるへし。

八番

左　百舌鳥

君か行跡のしるしにさしをくや木毎の枝にもすのくさくき

右　箸鷹（11ウ）

はし鷹の尾つゝのうへに置露は君を忍ひのなみたなりけり

判云、左の歌よろしからす。きことのえたは梅にや侍る。又行さき〳〵の心もあるにや。いかさまよくたゝしたくは侍れとも、なにと成らん空おそろしく侍るまゝに、右のかちに侍る。よき分別により

九番

左　鳩

わか涙雨にまかひて鳴鳩のふかき思ひを君はしらしな（12オ）

右　雀

呉竹のやとりしめたる村雀君ゆへにこそ立騒きけれ

左の作者、常にも森のしけり、かれ木の枝などにすみ、こゑおとろ〳〵しくなきたまふは、君ゆへならすともありなん。右の立居さはかしきも生得なれは、かつ〳〵持たるへし。

十番

左　山雀

瓢箪に入山からも今はまた家をわすれて君を尋る（12ウ）

右　四十雀

としのほとに似合ぬ恋を四十からはしめの老と人はいへとも

左の作者、多年すみなれし家をわすれしも、余の事にや。右は、四十雀といふに付て、はしめの老をおもひ出し、はつかしき心も侍るを、君ゆへにはやるかたなくこそ。右かちに侍るらん。

十一番

左　るり

るり色に身は染なしてこふれとも人の心やつれなかるらん（13オ）

右　こま鳥

いはけなき君の心居つゝやとてやすむ時なくあそふこまとり

左のるりいろさらすとも、むまれ付なれは、珍しからす。右、駒鳥といふことを、身にいひなされたるこそやさしく侍れは、また右かちに侍る。

十二番

左　ひは

あはぬひは幾年月と白浪の立居に付てねこそなかるれ（13ウ）

右　鴉

手をまはし世のさかしらにいひなさんけう腹立は鴉よろこふ

左の歌、哀もふかくよくいひなかされ侍る。右の歌、興ある程、歌けうはら立は鴉よろこふの本文も亦おかし。されとも、あはぬひはの哀ふかく侍れは、尤左かちたるへし。

十三番

左　菊いたゝき

秋の色を春よりも先みせはやの菊いたゝきの身の思ひ知れ（14オ）

右　てらつゝき

仏にもいのらんためか寺つゝきつゝきまいれは逢ぬ君哉

左の歌、秋の色をはるよりも、まつ君に見せたきとおもふ心さしきもやさし。されとも、きくいたゝきを身の思ひとのたまふこそ心得ね。元来生たれはさせる事なきにや。されと、右の歌、ことさら興さめて、あしく侍るまゝ、かた〳〵左かちたるへし。

十四番（14ウ）

左　には鳥

いのるてふかひこそなけれあふ坂のゆふつけ鳥と名にはたてとも

右　鵜

身のうさのむねにたく火をけさはやと水にのても猶そこかるゝ

左の作者、神にいのる心を身によせてのたまふ余、歌の姿もよしありてきこへ侍る。右の歌、其名をかくされ、よもおほつかなく、むねにたく火をけさはやの作意もよろしからすとよ。左の御歌は世に名高きことなれは、かた〳〵（15オ）もつて左のかちに侍るへし。

十五番

左　鷺

君かあたり雲井遥に思ひやるうへ見ぬ鷺と人はいへとも

右　鶯

つれなさを思ひ余てみし夢の世を鶯と鳴わたるなり

判云、左の御歌を恐れ〳〵さたし侍る。誠に歌袋もやふるゝはかりむねふくるゝ。御歌（15ウ）きもたましいにそみ、おそろしく、此うへは批判にも及はす、いつかたへもつはさにまかせてとひさりたくは侍れとも、彼御方の羽つかひにあひなは、のかれ得ることもかたかるへし。同姓に侍るほとゝきすもちかく寄て、「聞たまへ。かゝる雲恐しき御詠今いかゝはせん」といへは、郭公、「つゝしんてはしめより此ことをこそ歎侍れ。此庵のあるしへも、小鳥網飼さしなとよせ給ふなといふほとの分別にて、何そや似合ぬ（16オ）こしたか殿をも伴ひ、其うへきくもおそろしき、うへみぬわし殿を請待し給ふ事、かへす〳〵もふかくの至りに侍る。とかくのたまふとも、何の益かあらん。鷲殿いかなる目出たき作ありとも、まけてわし殿のかちにさため給へ」といへは、鷲はう〳〵とかた声にいきつきていはく、「寔にそこにいはるゝことく、今いかにおもふともかなはし。さりとては、あれも不肖の身に侍れと、雲のうへのはるのはしめの御歌合、あまさかるひな人までも鷲を賞し（16ウ）給ふそかし。唐にも千里鷲鳴てと作り、日本にても、わか先祖、初陽毎朝来のことはをのへ、あるひは、梅のはな笠きたるといひ、あるひは、花をぬふてふとよみ、いはけなきめのわらはきても、鷲よこかめやほしきちやほしきなとゝよみ、心有人は、うくゐすの宿はととはゝなとゝよみ侍る。すへてみおわかことにあらすや。されは、われ今の詠吟、おそらくはわし殿の御歌に、まさりはすると（17オ）も、をとらしかし。今かゝる判者になるこそ、身の冥加の中不運にて侍れ。たとへ、羽先より尾つゝまてやつさきにあふとも、何のかなしひかあらん」といへは、ほとゝきす泪をなかして教訓しけるは、「御身のことは、ともあれかくもあれ、おなしかい子より生出しわれ〳〵にいたるまて、のかるゝことあらし。しからは、子孫もなかくたえ、跡とふ人もあらし。只妙法蓮花の御唱のことく、妙なる御心をもつて、（17ウ）人のこゝろをもよろこはせたまへ」とすゝめけれは、ちしなくわし殿のまへにほそり居て、左勝に定め侍りぬ。わし殿、よろこひ、おほきに羽うつて飛去ぬ。あふなき批判にこそ侍れ。（18オ）